



Title	「平和的生存」をつくる学習：加害と被害の同時存在からの批判的再構成〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	阿知良，洋平
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第11855号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59173
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Yohei_Achira_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称 博士(教育学) 氏名 阿知良洋平
審査担当者 主査 宮崎隆志 (教授)
副査 姉崎洋一 (特任教授)
副査 間宮正幸 (教授)
副査 佐貫浩 (法政大学 教授)

学位論文名

「平和的生存」をつくる学習
—加害と被害の同時存在からの批判的再構成—

戦後社会教育学の課題は、新しい社会秩序を構成する主体の形成のための実践論理の解明にあり、平和学習論はその主要な柱の一つであったが、実践に連続する平和学習・教育論の追究は、基本的には残された課題であった。他方、暴力を克服し平和を実現する主体の形成を課題とする平和学習・教育論では、暴力性・攻撃性の理解が焦点となるが、戦後日本においては被害者の悲惨な状況を知ることによって、暴力を批判する主体が形成されとする論理が主流であった。

それに対し本論文は、平和維持の名の下に抑止力としての暴力が容認される転倒的社会状況を理論形成の前提にし、その下での平和学習の構成論理の解明に挑戦している。そこでは平和を願う主体にも内在する暴力性は、転倒的な社会システムに諸個人が位置することにより必然的に生ずる加害・被害の二重性の帰結として把握され、同時に、実はその点にこそ日常意識における転倒した平和理解を批判的に克服する鍵があると主張している。これは学校を基盤に構築されてきた佐貫浩らの平和学習論の先端的成果を共有するものである。その地平を踏まえて、本論文がもたらした新たな知見は以下の四点である。

第一に、批判的な平和学習が平和を追求する主体の形成につながるための条件と論理を明らかにした。本論文のオリジナリティは、加害・被害の二重性の意識化に至る学習と、そこから開始される平和創造のための実践過程において求められる学習の質の区別について実証的に明らかにした点にあるが、この両者が連続的あるいは不可分に展開する場合にのみ、転倒的な社会システム内において平和創造の主体の形成が可能であることを示した。

第二に、従来の平和学習論において暴力性批判の根拠としてアプリオリに措定されていた生命という価値を、自然・労働・他者、そして自己がおりなす存在の次元にまで浸透した転倒性の解決を志向する実践において必然的に措定されるものとして位置づけた。平和のために暴力が容認される転倒的社会においては、なぜ暴力が悪なのかという点さえもが論点となると本論文は指摘する。その際に、生命という価値が社会の転倒性と外在的に提起されても実践的な有効性は持ち得ない。つまり命や自然を大切にしようという呼びかけだけで

は、平和は実現しない。本論文は、その究極的な価値を二重性や転倒性が支配する社会の中で批判の極として機能させるための実践の論理を明らかにしている。

第三に、平和創造の主体を形成する学習実践の構造を明らかにした。転倒的な平和意識を所与とする青年たちが、二重性を意識化し、平和創造の実践を展開していくためには、ケア的な空間の形成、自然と他者の他者性を尊重するような労働の価値の対象化、そのような労働を再生産できる道具、さらにその実践の社会的価値を評価できる思想の形成が必要であることを本論文は示した。これは平和創造の主体を形成する学習構造論の端緒をなすと言える。

第四に、以上のような平和学習論は、システムの内にいながらシステムを批判する主体を形成する実践の論理として展開させることが可能である。この主題は、フレイレに代表される批判的な社会教育学の基本課題であるが、その実証的な研究の課題と方法の検討は、実践の状況にも規定されて必ずしも進んでいない。本論文は平和という現代世界の最も困難で本質的な問題に挑戦することによって、そのような状況に一石を投ずる成果を産出したといつて良い。

しかし、次の点は課題として残された。

第一は、平和学習の前提となる平和の定義をより精緻化することがある。本論文では平和を「他者の固有性と自立性を尊重した関係様式」と定義しているが、この定義だけでは資本主義社会における搾取、あるいはそこから派生する分断はこの関係様式に反するという理解を導く可能性もある。本論文は平和概念を、分断の下で生ずる矛盾を暴力に依存せずに解決する方法あるいは過程として理解することを強調しているが、その理解を支え得る定義の厳密化が課題となる。

第二に、本論文における学校外の生活・労働・生産と結びついた平和学習・平和運動の構造の解明の成果を踏まえて、学校内において、今日求められる平和の価値を実現していく可能性と方法を提起し得るより一般的な平和教育概念と実践枠組みの解明が期待される。

第三に、再帰性が強まった現代社会において求められる批判的学習論として本研究が有する意義を明示化することが期待される。平和学習論にとどまらず、二重性や分断という課題を追究している他の社会科学分野との対話によって、本論文が有する普遍性が明確になると思われる。

以上の成果と課題に鑑みれば、本論文は、現代の社会状況と先行研究を踏まえたテーマ設定の妥当性、二重性の対象化と存在の次元の矛盾への対峙からなる平和学習の内容論の独自性、そして論文構成における論理性と完結性を有することから、博士論文としての基本要件を満たしたものと評価できる。